
時空放浪記

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空放浪記

【Zコード】

N2624D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

俺の名は、スカイ・アル・グレイ。宝石専門の世間に音に聞こえし大泥棒さー。今夜も眠らず一働き。かの有名な時空管理局の宝石狙い。だけど、事件はここで起つたんだ・・・

第一章 金は天下の回りモノ

『金は天下の回りもの』なんてこの世の撻。歪みきつた廃墟のこの世界に通用しないような嘘寒い言葉は俺には一切関係ない。だつて、それは有るところには有るし、無い所にはどう探したつて無いんだもん。だから奪い取るのみ。そう、俺は今を騒がすお尋ね者のしがない大泥棒なのさ。

名前はスカイ=アル=グレイ

この名前を知らない者はいないはずだろう。専門は宝石泥棒。で、今日も荒稼ぎの為に盗みに入ろうと思い、世間に名高い宝石が管理されている、ここ時空管理鉱物取り締まり研究所と言つ場所に侵入しているのさ。

しかし、音に聞こえしこの研究所の、何と警備が厳重なこと？潜り込むのがこんなに困難だなんて思いもよらなかつた。そこらの宝石店に侵入する方がどれだけ簡単であろう事か？赤外線は張り巡らされているは、監視カメラに、指紋コードのパスワード。でもそれをクリアしてこそ本当のプロつて言つ者。しかし！それはこの俺様の抜かりない所。事前に指紋コードを盗んでいるし、監視カメラ、赤外線は俺の開発した高度なセンサーが反応してくれるから問題は無い。後はこれらに対し着実に対応するだけ。だからどんなに山積みにされた難関も逆に簡単。全く『盗んでください』って言つている様なモノな訳さ。此処まで徹底されても、何だかやる気が失せる。人つて、困難だから、余計に燃えるつて言葉、知らないかな？これつて俺が天才だから言える言葉なのかも知れないけどね？最後の監視カメラに画像妨害装置を取り付けて視界を工作するだけで、いとも簡単に宝物の宝石室に潜入完了。

中は赤外線警報装置も無い。そこは覆いかぶさる様な透明ドームで天窓の有るただの個室。その部屋中にガラス張りに整理されたお宝発見！どれもこれもかなりの値打ち品！

「うひょー！スンゲーお宝ジャン！」

小躍りしたくなる俺は、心躍るそれを抑えつつかさず、左手に嵌めているリングの赤いボタンを『ポツッ』と押す。すると、大型のアタッシュケースが飛び出したのをこの目で確認した。俺はこれをいつも愛用している。盗んだ宝石を入れるための所謂宝箱。これなくしてこの仕事は成り立たない。

「噂には聞いてたけどこんなに有るとは思つてなかつたぜ。これは盗み甲斐があるというものさ～泥棒冥利に尽くさるとはこのことだね！」

俺は片っ端から質の良いのを選びそのケースに入るだけの宝石を選び抜き、そして収納した。

「さてと、これで今日の仕事は終わり～！」

後はこの宝石を金に換えるだけ！そんな事をのんきに思つて一息入れる。しかし、何だつてこの部屋はこんなに緊張感が無いんだ？ここに入る方がどれだけ大変であつたか？

一息入れていると、不思議に他に興味の無いこの部屋の内装がハツキリ断片化した。

「何だ？あれは……」

そう、自分の仕事にかかりつきりですっかり見落としていたのだ。この部屋の中央に、石煉瓦の階段がある。そして、その上から鈍い赤色をした仄かな光が放たれていることに……

俺は、その光が何なのか？それが無性に気になつて、取り敢えずアタッシュケースをリングに収納し階段に足を掛け上り始めた。淡く揺らめくその光は、上るに連れて濃く色づいている。そして、最後の一歩を踏み上った。

「何だよ……この赤い宝石は？」

透明ケースに収納されてあるだけではなく、その石からは無数のコードが天井に延びていた。俺は気になつてその石を取り出すために、ケースの中に手を差し入れた。すると、

「何だ、お前は？」

突如耳にそんな言葉が響いてきた。

周りを見回すが、人らしい気配など無い。

「お前も、儂の力を目当てに奪いに来たのか？」にしては、周りの宝石にしか目をくれてない様子だが？」

俺は、この石が喋っていることにやつとのことで気がつき、「

「石が意志持つて喋った！」

動転して、思わず階段を転げ落ちてしまった。

「痛で！なんだそりや？俺は大泥棒スカイ＝アル＝グレイ様だ！宝石漁りに来たんだ。知るかよテメーの事なんか！」

腰は痛いし、この人を見下ろしているような言葉遣いが気に入らないし、訳が分からぬと思わず当たり散らした。

「儂が何なのか分かつてないらしいな？面白い奴だ。どうれ、儂もこんなところで繋がれていのにも飽きた。お前と一緒に行くとしようか！」

「へ？」

石がそう言うと、階段上から突然まばゆい赤い光が眼光に人束のラインとなつて飛び込んできたんだ。

「痛

！」

俺は思わず大声を上げてしまった。とてつも無い苦痛が右目を襲つた。すると、何がどうなつたのか？痛みで押さえている俺の右目から滴る赤い血が掌にべつとりと付いていた。

そして、それをきっかけとして非常警報装置が鳴り始めたのである。

「やつベー！逃げなきゃ！」

腰を上げる姿勢になつた俺は、背後でカシャカシャと写真でも撮られているかのような音を聞いた後、次の瞬間、グニャつとした空間に放り込まれた。背後から『クルッピー』という鳴き声らしき声が聞こえる。そして気がついたときは何処かの村山に迷い込んでいたのであつた。

第一章 金は天下の回りモノ（後書き）

かなり短いお話です。章に区切るのも面倒だけれど、区切つてみました。

読みやすいお話なので、是非目を通してくださいませ。

第一章 バインとルマイン

「んで？ 今回は一体何処に居るんだ？」

どのくらいの月日が過ぎたのであるつか？あの時俺の右目に宿つた石。名前はルマイン。と言うらしい。らしいってのが、イマイチ俺には要領を得ないのだが、こいつはあるの研究所で、『时空移動』の管理をしている石であることだけは分かつた。自らの発する光が时空移動に大いに役立つのだと言う事くらいしか判らない。だって只の泥棒に、それ以上の専門的事柄を言われたとしてもチンパンカンパン。大まかなことが判つていればそれで良い。

そして、何百回目かに渡る时空越えをして今回は此処に来ていた。俺たちは、滞在期間を一つの时空越えに対して大体三日間を日安に移動している。

「で、此処は何処だよ？」

何度も言わせるなよな……川辺に座り込んで、自らの顔を洗っている俺は、水面に映つていてる眼帯で隠していた右目の今むき出したになつてているルマインに向かつて問いただした。

左目の、明るい緑色した瞳の色とは正反対の色の赤い瞳が語る。
「齡暦十三年のアイハダ村だ。时空越えをしているお前はある意味バンパイアーのように年をとらないから、時間を気にすることはない

機械が話しているみたいだな。いつも思うことだが、俺はこの頭に響いてくるような声が、気に入らない。けど、こいつに問いただしても、人に宿つたらこのルマインが死ぬまで俺の目眼に宿ると言う。だから余計に厄介だ。俺の夢は、こんなことじや無い。

「ははは、訊くだけバカでした」

「楽しいであるづつ？こうやって、时空を超えての旅は？」

「アホみたいに楽しいね……お前の言つてた力が、时空超えで、しかも翻訳まで兼ねてるなんて知らなかつたわ

うんざりな表情で呟く。年をとらないってのはある意味いいことでは有るが、まるで、時差ぼけにでもかかつた気分だ。

「しかも今では、俺はばっちりお尋ね者の身分でだな、時空管理鉱物取り締まり研究所の方で撮られた写真が出回ってるなんて、考えても頭が変になりそうだぜ……」

思わず皮肉を込めた笑いしか出来ない。

「愛おしいマイホームにも戻れずに、こんな放浪の旅をしなくちゃならないなんて、素敵過ぎて笑いが止まらないってもんだ！」

全てお前のせいだぞ。と言わんばかりに水面に映っている自分の顔に向かつて石を投げる。綺麗な波紋が広がった。

「ははは、そうカリカリするな。大いなる力を手に入れたのだぞ？」「欲しくないってんだ！俺の夢は大金持ちになつて、洒落た屋敷に女はべらせて、ウハウハつてのが理想だつたんだぞ！」

その理想が頭をよぎる。虚しい……

「それは無理だな。お前は未来永劫時空を彷徨う運命だ。お前の右目がくり抜かれるか穴があかない限り死は訪れない！」

その言葉に苛立つた俺は、

「暫く眠つてやがれ！」

と、手首のリングから黒い眼帯を取り出し左目を覆つよつに巻きつけられる。ルマインは、眼帯をして視界を遮つている間は俺と直には話すことは出来ないからだ。

俺は川辺に座り込んで今度は特殊リングの黄色いボタンを押す。すると、長く鋭い針が数本セットになって飛び出した。いつもは鍵を開ける為に使用している物では有るが、今となつては、生活用品と化している。

上流の水際の岩場に、水しぶきが上がつた。魚が跳ねる。俺は思わず針をすばやく解き放つた。するとどうだう？ プカプカと今朝の食事が流れてきた。俺つて器用？ なんてね？

「さて、飯にするか……あれ？ それにしても、バインはどうに行つたんだ？」

バイン。それは、ルマインが、俺の目に融合した時流れた落ちた血から象られた、ルマインの半身。毛むくじやらでその背には鳥のような翼を持った、得体の知れない生き物。だけど、ルマインの半身とは思えないほど心根の良い生き物である。今では俺の良き相棒。

「クルツピー！」

「何処行つてたんだよ？」

魚を焼く用意をしていたそんな中、背後から羽根をばたつかせ、その、バインが飛んでやつてきたのである。

「おっ！グミの実じゃん！サンキューな！」

どうやらバインは、朝飯用にグミの実を何処かしらから調達してきたらしい。

「お前も食えよ！」

俺は、自分に渡されたその実の一つを口に放り込んでやる。バインは嬉しそうに、

「クルツピー」

と喉を鳴らしていた。

第三章 アイハダ村

俺たちは、一日後アイハダ村の中心街に来ていた。昨日の朝口にした物以外何もお腹に入れていない為、かなり空腹である。街は、屋台など出て大賑わい。何かの祭りでもある様子だ。だけど、俺は此処で食料を調達など出来はしない。通貨が俺の居た世界とは違う為、使用することは出来ないし、それに……

「にしても、此処でも俺は指名手配人か～名人はつらいなあ～」木下駄の橋に設置されている指名手配人の立て札は、家の軒下にも貼り付けられていたりして、五百万グランの賞金の文字が配列している。つまり、盗んだ宝石の出所が判ると俺の居所がバレてしまうと言つ仕組みだ。

「今日は、似顔絵か……この時代には写真なんて物は無いのかもな？でも、この一枚目の顔をここ迄醜男にしてくれちゃって、許せるものじゃ無いな～」

俺は、もつと男前に絵を描き直した。

「そうそう、こんな所かな？」

満足して筆を締まつたところに、バタバタとした音がこちらに近づいてきたのを感じ取った。

「何だ？」

何が起こっているのかを確かめるために、俺はその方角を見ようと片目を凝らした。

すると、おぼつかない足取りで人込みを搔き分けるように、俺と

同じ年頃の女の子が乱れた振袖を揺らしながら走ってきた。

「待てー！」

どうやら、追いかけられている様子である。と、気がついた俺は、娘の姿に惹かれるかのように、娘の手を引き寄せ、自ら被つている黒マントの中に隠した。

「黙つて……」

負い掛けで来る男共が通り過ぎる迄、俺は、彼女を隠した。そして、路地から抜けるように静かな飲み屋の路地裏に回った。

既に彼女を見失ったのだろう、男共の声は遠のいていた。俺は、マントから娘を解放すると、

「どうしたんだい？ 追いかけるなんて？」

とにかく、事情を聞こうと思った。理由がどうであれ？ 助けないわけはなかつたが。

しかし、娘は、

「コンは？」

どうやら、俺のことよりも誰かを案じている様である。

「コン？」

おれは誰のことを言つているのか判らなかつた為、問い合わせ返したが、その娘は俺から離れるように、手探りで道をフラフラと歩き始めた。

「もしかして、君？ 目が……」

問いかげようと、危なっかしい足取りの彼女の後を付いていこうとすると、

「リンネン！」

一人の青年が路地裏に駆けつけたのである。

「コン！ 私はここよ！」

俺は、二人がお互いを気遣いながら抱きしめている様子を見て、きっと不服な顔をしていたに違いない。

「もしかして、貴方がリンネンを助けて下せつたのですか？」

暫くして、一人の世界が終わつた頃に、コンという人物が俺に気付き問い合わせてきた。

「そう言う事になるのかな？」

素直にそうですとは言い切ることが出来ないところは、ヒーローにはなれない俺の短所かもしれない。いや、まあ、泥棒なんだけどね。

「ありがとうございました！」

コンは丁寧に頭を下げた。そして、ソバカス顔をクシャクシャにして笑つて来たのであつた。

俺は、コンといつ青年に導かれて、コンの住んでいる家に訪れた。簡素な瓦葺の木の家。少し小高い丘の上有るこの家は、周りは田畠で覆われている。多分、コンという青年は、この世界で言う農民であろう。

「リンネンを助けて頂き、ありがとうございました！お礼はこのくらいしか出来ませんが……」

この位といつものでも、俺とバインには有難いものであった。背中とお腹がくつ付きそうな位の空腹感。それを満たしてくれるだけの、質素ではあるがご馳走を頂いたのである。

悪党も、時には善い事をするものだ！しみじみ感じ入る。「で、追い掛けられた理由ってのはなんかい？」

夕食を済ませ、一息入れた俺はコンに問いかけた。コンとリンネンは寄り添つて少し顔を見合わせるような形で、俺に向き直った。

「リンネンは、この村の地主、タンペイに見初められたのです、そして強引に明日結婚しなければならなくなつたのです」

お決まりなシナリオみたいだ。悪党の地主と、それにひれ伏すか弱き労働者。

「今日の祭りの様子をご覧になりましたか？」

「祭りつて……あの軒を連ねるような屋台？」

確かに目にはして居る。この村にしてみれば、豪勢な祭りにも思えたし印象がある。

「そうです。タンペイは、前夜祭のごとく仕切つて、祭を催したのです。リンネンは囚われの身で、今まで監禁されていたのを、この僕が助けに入つた。今ではタンペイの指揮下、村を上げて捜していることでしょう……」

「コン……」

リンネンは黒目がちな瞳を潤ませてコンの話している顔を見てい

る。田が見えなくとも、声で判断しているのだ。

「リンネンと僕は幼馴染なんです。彼女の為に、この身を呈して守りたかった。あのような強欲の塊のよつたタンペイの所には行かせたくなかつた！……確かに、リンネンの目を治せるだけのお金を持つているタンペイかも知れない。でも、だからと言つて僕はやすやすと……」

と、コンは側に居るリンネンの肩を抱き寄せていた。俺は思わず見せ付けられてくるかのようだ、苦笑にする。「馳走様……

「一飯の礼つて言葉は有るよな～？」

俺は、ボソリと声に出して言つた。お金があれば治るリンネンの視力。ならば……

「へ？」

「あのや詫きたいんだけど、タンペイの屋敷つて何処？」

既に気付いているのか？ バインは、嬉しそうに、

「キュルル～クッピ～！」

と、脇で鳴いている。コンはどういつもりで訊いてきたのか？ 不思議そうだったが応えてくれた。そして、

「ところで……どうやらかでお会いしたことありますか？ それにお名前は？」

コンは、訝しげに見詰めていたが、

「氣のせいでしょう！ 全くの、初対面です！」

俺は深々とマントで顔を隠した。まさか、あの不細工な手配書に効力があるなんて……と俺は再び苦笑にするしかなかつた。

第四章 タンペイと琥珀

タンペイ宅は、この街の中心にあることは行つてみれば良く判つた。誰もが羨むような豪邸。そして、強欲を尽くしているだけある、門構え。俺は得意げに鼻の頭を指で擦つた。

さてと。

「頼もう！」

大きな声で、門の戸を叩く。中は、行方知れずとなつた、リンネンの搜索でバタバタと忙しそうにしていた。そして、戸が開いた瞬間、いつもの調子で、俺は後先考えずに、

「おっと、失礼！」

出てきた男に対して回し蹴りを食らわせた。マントが翻る中、バインが飛び出してくれる。

「何者？曲者だ！である……！」

中の従者共が、一斉に俺に向かつてくる。「んなのは朝飯前だ！」

「バイン！」

俺は、炎が巻き上がる刃に変身したバインの柄を取り上げると、一気に住居内に進入したのである。

俺の信条その壱！

『盗みはやるが、人殺しはしない！』

立ち回りは豪快に且つ慎重に！この炎は業火。自らの身を守る物。決して自らを焼き尽くす事はない。それが俺の宿命。

「近寄ると燃えるぞ！それでも良いいってんなら俺は遣り合つても良いんだぜ？」

下段に構えた剣をジリジリと番人たちの前に突き出す。逃げていぐ者もいれば立ち向かつて来る豪傑もいる中、俺は先を急ぐ。俺の持つ炎は一気にこの豪邸を焼き払う様に振りかざしていた。だって

こうすれば、諸悪の根源の親玉、タンペイを燻りだすことが出来るからだ。

それを悟った者の一人が、屋敷に入つていくのが見えた。俺はそいつの後ろを追うように駆け出したのである。

「『』報告いたします！ただいま賊の一人が入つてまいりました！不思議な力を秘めた者です！今すぐ此処を離れてください！」

一気にまくし立てた男はその場に力尽きるように倒れた。そのまま子を女をはべらせた狸親父のよつなタンペイが、悠長に寝そべっている。

「ふん！時空管理からの要請が来ている賞金首のあの者だろうな。琥珀！お前の出番だ！」

襖の奥に控えていた着流しの浪人風の男はその言葉を聞き入れて立ち上がった。そして、

「御意！」

その場を下がつたのである。

「アンニヤロ！何処行きやがつたんだ〜！」

俺は、追い掛けたのは良いが、立ち塞がる敵と、襖を開けるたびに出くわし、足止めを食らつていた。屋敷の五分の一は火が回つただろう。煙と炎でうざつたい。そんな中、今倒した敵を押し退け次の襖を開けた。すると、そこで今かと待ち望んでいた者であろう？ヒヨロリと痩せた着流しの男が剣を携え立っていたのだった。

「今までその威力が続く事かな？」

「ふーん。こりやまた自信ありげなことで？」

俺は炎が上がる剣を下段に構える。すると、浪人風の男の後ろから『スルリ』と大蛇が現れ、男の右腕に這い上がつてくる。

「ブツキミ〜」

男はそのまま右腕を上げると、蛇はグルグルと巻き上がり、その掌の先まで来ると、蛇の目がピカッと光り大剣に変わる。

「キユルルン！」

突然、バインの剣が同調するように鳴き始めた。

浪人風の男が一振りすると、金色の鱗粉が辺りに舞う。その鱗粉が俺の方に流れてきた為に、俺は剣を大きく振る。『ブオツ』と炎が燃え上ると、鱗粉を燃え上がらせた。

『パラパラ』とその燃えカスが足元に落ちた。しかし、それ以外の畳や障子が、見る見る間に砂に変わっていた。

「あぶねー！」

俺は、浪人風の男を睨み付けた。

「テメー！何者だよつ！」

すると、浪人風の男が、額に巻きついている布をスルスルと取り去る。そこには、飴色の黄金色をした石が埋め込まれていた。

「我が名は琥珀。もう忘れたか？ルマインよ」

ルマインのことを知っている？と言う事は、こいつは時空管理の……それを見たとき、俺の右目をズキリと鈍く痛み、眼帯から赤色の血が滴り落ちてきた。

「へ～直々のお出ましかい？大げさなこつて…さてどうするよ？バイン？」

「キユーピッピッピー！」

「そうかよ！なら任せたぜ！」

俺は、バインの言葉を受けて琥珀に飛び掛つて行く。額を狙うかのようにして、剣が振りかぶられる。が、それを受け止める琥珀。

「ルマイン？お前自身で戦う気はないのか？」
不敵な笑いの琥珀。

「キユロツピー！ピツピー！」

「ふん！テメーごとに出てくるつもりはねえ」とよ一
横に振り切られる剣。炎が『ブワツ』と広がる。

「好戦家のお前がか？ならそのまま戦うがいい！一体何時まで保つかな？」

琥珀の持つ力の一部なのであろう。かなりの飛躍で俺の頭上を越

え、背後に回り、剣を槍に変化させて突く。俺は間一髪で避けるが、

マントの右袖部分がサラサラと砂になり落ちた。そのことに気がつき、俺はマントを脱ぎ捨てる。現代風のタートルネックにジーパン

の真っ黒な身を『ピタリ』と包む服が露になった。

「やろー！なめやがつてー！」

俺の剣も変化し、 Nunチャク状態になる。『ヒュン』と琥珀めがけて放たれるが、槍で振り落とされる。上手く的に当たらない。

「何とかなんねーのかよ！」

苛立ち始める俺。実、短気であった。

「ピッピッピ――――――！」

『ボツ』と炎が大きくなる。その炎が俺の手を覆うように発せられたので、

「アチ！つておいつ、怒んな！」

俺は思わずヌンチャクを落としそうになっちゃった。

「バカ同士だな……」

クククと嫌味な笑いがこぼれている。

「バカはその分しつけーの！さつさとくたばりやがれつ！」

琥珀の挑戦に乗つて、俺は、炎の舞い上がるヌンチャクを頭上で振り回す。

「バカの一つ覚えか……ぐだらん」

琥珀は、再び宙に舞う。しかし、その宙に舞つた瞬間を俺は見逃さなかつた。待つてましたとばかりに、ヌンチャクを矢尻に変化させる。そして、飛び上がり炎を影に炎が消える瞬間を見計らつと、宝石の有る額を目掛けて振り下ろす。

「何！不覚……」

『パリーーン』と琥珀が割れる。俺は着地して、

「ざまーねえや。へへん！さあて余興はここまで！と次急ぐか！」

しかし、その浪人が、サラサラと砂になつて崩れ去るのを見て瞬緊張が走る。自らの最期は？でも、その様子を一瞥すると、再び自らの使命を果たそと、再奥へと走り出した。来た道の柱が炎で

崩れ落ちていった。

辺りの部屋が炎に包まれているところに、一箇所だけこの部屋はまだ安全であった。『バンツ』と俺は勢い良く襖を開ける。

「テメーがここ地主って奴かよ？ 奇妙な配下差し向けやがつて！ その言葉を聞いてひれ伏すかのように土下座をするタンペイ。ある意味気持ちが良い。」

「済まない！ 許してクレ～何でも言つ」と聞いた瞬間、時空管理鉱物取り締まり研究所にも黙つていてやる。だからこれ以上……」

余りにもへつらうタンペイに拍子抜け。しかも、逃げもせざこの場所に留まつていて、剣を向けることも莫迦らしく思った俺は、

「ふん！ なら、お前が持つてゐる全ての金と、明日ある結婚式つてやらをチャラにするつてのなら考へんでもないね？」

バインは元の姿に戻り、俺の肩にちょこんと乗つかつて、タンペイは顔を上げ、

「おおっ、ありがたや～それで許してもらえたと云つのであれば、いくらでも持つていってくれ！ 金は、裏の蔵に有るぞ！ 鍵は此処だ！」

まるで、用意でもしてあつたかのようだ、鍵はタンペイの正面の畳の上に置かれた。そして、それを取ろうとした俺はかがみこんだ。

「ヘッヘッ！ 察しが良いじやない！」

それを見て、ニヤリとタンペイが口の端を歪ませた時、

「覚悟！」

安心させての非常極まりない行為。背後で、配下が俺の背中を狙つて刀を振り下ろしていた。しかし、肩に止まつていたバインが真剣白羽取りで防ぐ。

「キュルッピー！」

何処にそんな力があるのか？ バインは刀と部下と一緒に吹き飛ばして、いた。

「どーもバイン！ やっぱり許さない！」

手の指を『パキン』と鳴らすと、バインは炎の剣に早代わりして、

立ち上がつた俺の右手に収まる。そして、タンペイを見下ろし、剣を振りかぶった。

炎上するタンペイ宅のその中で、

「さあ――――――――」虹は響を渡つたのである。

第五章 ハピローグ

ゴンと、リンネンが玄関先に居る。
再び黒いマントを頭から被っている俺。

「これ、やるよ」

昨夜手に入れた金を、特殊リングに収納しておいた。二十万グラム分が袋に入つてゐるのを差し出す。よく分からぬ仕組みになつてゐるそれを目をぱくぱくさせながら見ているゴンを他所に、俺は満面の笑みで渡した。

「え？ でも……」

躊躇してゐるゴン。どうして？と不思議そうであった。

「心配ないから！ 昨夜ご馳走いただいた礼よ。それにこれ地主から巻き上げ……じゃなくて、頂いた物なんだな。気にしない気にしない！」

バインの首ひじきとこひを猫のよつて撫でながら俺は満足そう 笑つた。

「それに、結婚式つてのも取りやめになつたから安心だ。良かつた ジャん」

「そうですか…… それではお言葉に甘えて」

ゴンはその袋を受け取る。

「リンネンちゃんの目。その金で早く良くなるよつてしてあづるよ 片目しかない瞳でウインクする俺。傍目には只笑つてゐるよつてしか見えないであろう。」

「本当にありがとうございます」

深々とお辞儀をする一人。

「じゃつ！ 僕はこの辺で。ばーい

二人を背に俺は歩き始める。

「あ、あのつ！」

突然の呼びかけに俺は振り返る。

「お名前は？」

フツと笑うと俺は半身を返し、

「只の孤独な旅人！それで良いっしょ？」

と、後ろ向きでヒラヒラと手を振つて歩き始める。

「キュピッピ？」

バインが余りにも冷やかすので、

「うるさい！格好よく去ってるんだから良いの！」

何だか落ち込んでしまう。

「くそー！それにしても、リンネンちゃん可愛かつたな～」

ユン達が、後方で玄関の戸を閉めた時、俺とバインは、再び時空の彼方へと消えていった。

昨日の夜に起こった火も消え去り、黒焦げた屋敷の残骸が、バス
バスと音をたて燻つていて。

「やーい。石ぶつけてやれ～！」

タンペイは無残にも氣絶した状態で、門の所に逆さ貼り付けされ
ていた。

その横には、『スカイ=アル=グレイ参上』と言つ文字と、店先
に張られていた賞金首の五百万グラムの似顔絵が一枚貼り付けられ
ていた。

第五章 ハペローグ（後書き）

短いお話をしました。

本当は、宝石の数だけお話し作れたら良いな～何て思つてゐる作品です。他にもこの話の別バージョンあるんですが、それはまた機会があれば。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2624d/>

時空放浪記

2010年10月8日15時34分発行